児のそら寝

要旨

僧たちがぼた餅を作るというのを、延暦寺の児が寝たふりをして待っていた。ぼた餅が出来上がり、ある僧が起こしてくれたが、待っていたと思われるのを恐れ、もう一声呼ばれてから返事をしようと寝たふりを続けていたら、僧たちが食べ始めたので、こらえきれずややあって返事をし、僧たちに大笑いされた。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め〜P一六・7〈ひしめき合ひたり。〉	延暦寺の僧たちが「ぼた餅を作ろう。」と言うのを、児が期待して聞いたが、起きて待っていたらよくないと思い、寝たふりをしていると、出来上がった様子であった。
第二	P一六・8〈この児〉〜終わり	僧が児に起きるよう声をかけたが、児はたった一度で返事をし、待っていたと思われたらいけない、もう一声呼ばれてから返事をしようと思うが、呼ばれず、僧たちがぼた餅を食べ始めたので、こらえきれず久しくたってから返事をしたため、僧たちに大笑いされた。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①今は昔、比叡の山に児ありけり。②僧たち、よひ
係助・区別　格助・場所　ラ変・用　過・終
の つれづれ に、「いざ、かいもちひ せ む。」と 言ひ
格助・体修　格助・時間　感　サ変・未　意・終　格助・引用　八四・用
ける を、この 児、心寄せ に 聞き けり。③さりとて、
過・体　格助・対象　代　格助・体修　格助・状態　カ四・用　過・終　接
し出ださ む を 待ち て 寝ざら む も、わろかり
サ四・未　推・体　格助・対象　タ四・用　接助・単接　ナ下二・未　打・未　仮・体　係助・同類　形ク・用
な む と 思ひ て、片方 に 寄り て、寝 たる よ
強・未　推・終　格助・引用　八四・用　接助・単接　格助・場所　ラ四・用　接助・単接　ナ下二・用　存・体
し にて、出で来る を 待ち ける に、すでに し出だし たる
格助・状態　カ変・体　格助・対象　タ四・用　過・体　接助・単接　副　サ四・用　完・体
さま にて、ひしめき合ひ たり。
格助・状態　八四・用　存・終

④この 児、さだめて おどろかさ むず らむ と
代　格助・体修　副　サ四・未　推・終　現推・終　格助・引用
待ち ゐ たる に、僧 の、「もの申し さぶらは む。
ワ上一・用(タ四・用＋補動)　存・体　接助・単接　格助・主格　サ四・用(謙譲)→児　補動・八四・未(丁)→僧→児　意・終
おどろか せ たまへ。」と 言ふ を、うれし と
カ四・未　尊・用　僧→児　補動・八四・命(尊)→僧→児　格助・引用　八四・体　格助・対象　形シク・終　格助・引用
は 思へ ども、ただ 一度 に いらへ む も、待ち ける
係助・区別　八四・已　接助・逆確　副　格助・状態　八下二・未　仮・体　係助・同類　タ四・用　過・体

①今となっては昔のことだが、延暦寺に児がいた。②僧たちが、宵の退屈なときに、「さあ、ぼた餅を作ろう。」と言ったのを、この児は、（自分も食べられると）期待して聞いた。③そうかといって、（ぼた餅を）作り上げるのを待って寝ないのも、きっとよくないだろうと思って、（部屋の）片隅に寄って、寝ているふりで、出来上がるのを待ったところ、早くも作り上げた様子で、（僧たちが）騒ぎ合っている。

④この児が、（僧たちが）きっと起こしてくれるだろうと（思って）待っていると、僧が、「もしもし。目をお覚ましになってください。」と言うのを、うれしいとは思うけれども、たった一度で返事をしたら、待っていたのかと（僧たちが）思うといけないと思って、もう一声呼ばれて返答しようと、

か	と	もぞ	思ふ	とて、	いま	一声	呼ばれ
係助・疑問	格助・引用	連語（係助・同類＋係助・強意（係））	八四・体（結）	格助・引用	副	八四・未	受・用

て	いらへ	む	と、	念じ	て	寝	たる	ほど	に、	「や、
接助・単接	八下二・未	意・終	格助・引用	サ変・用	接助・単接	ナ下二・用	存・体		格助・時間	感

な	起こし	たてまつり	そ。	をさなき	人	は	寝入り
副	サ四・用	補動・ラ四・用（謙）僧→児	終助・禁止	形ク・体		係助・提示	ラ四・用

たまひ	に	けり。」	と	言ふ	声	の	し	けれ	ば、
補動・八四・用（尊）僧→児	完・用	詠・終	格助・引用	八四・体		格助・主格	サ変・用	過・已	接助・順理

あな、	わびし	と	思ひ	て、	いま	一度	起こせ	かし	と	思ふ
感	形シク・終	格助・引用	八四・用	接助・単接	副		サ四・命	終助・念押	格助・引用	

ひ寝	に	聞け	ば、	ひしひしと、	ただ	食ひ	に	食ふ	音
格助・状態	カ四・已	接助・順偶	副		副	八四・用	格助・状態	八四・体	

の	し	けれ	ば、	ずちなく	て、	無期	の	のち	に、
格助・主格	サ変・用	過・已	接助・順理	形ク・用	接助・単接		格助・体修		格助・時間

「えい。」	と	いらへ	たり	けれ	ば、	僧たち、	笑ふ	こと	限りなし。
感	格助・引用	八下二・用	完・用	過・已	接助・順理		八四・体		形ク・終

（食べたいのを）我慢して寝ているうちに、（ある僧が）「やあ、お起こし申し上げるな。幼い人は寝込んでしまわれたよ。」と言う声がしたので、ああ、つらいと思って、もう一度起こしてくれよと思いながら寝て聞くと、（僧たちが）むしゃむしゃと、ただ食べに食べる音がしたので、どうしようもなくて、久しくたった後に、「はい。」と返事をしたので、僧たちは、笑うことといったら際限がない。

学習活動のポイント

■導入

学習活動のポイント

❶日本の古典文学で、知っているもの、読んだことがあるもの（現代語訳も可）をあげる。どのような印象を持っているか、発表し合う。知技(2)イ

❶生徒はすでに、小学校、中学校の国語の授業で、和歌、俳句、「竹取物語」「枕草子」「徒然草」「平家物語」などに触れている。それらを振り返らせると共に、高等学校では、そうした今までの学習を踏まえ、より詳細な内容把握や、本格的な鑑賞を目指すことを確認させる。

【評価】古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。

■展開

学習活動のポイント

❶「児のそら寝」を音読して、歴史的仮名遣いの読み方に慣れる。（「古文を読むために1」を参照する）思判表B(1)ア

❷本文中の意味のつかめない部分を抜き出し、古語辞典で意味・用法を確認する。（「古文を読むために1」を参照する）知技(1)ウ・(2)ウ

→**「言葉と表現」1**

❸現代語訳する。誰が、何をしたという関係をたどりながら、話の展開をつかむ。知技(1)エ　思判表B(1)ア

❹児の心情の変化を話の展開に即してまとめる。思判表B(1)ウ

→**「学習のポイント」1**

❶「古文を読むために1」を参照し、歴史的仮名遣いの読み方を確認する。教師の範読に続いて生徒に音読させる。適当な長さに区切りながら何度も範読、音読を繰り返す。また、そもそも歴史的仮名遣いとは何か。ということにも触れておきたい。現代語の助詞「は」「へ」が、歴史的仮名遣いの名残だということを説明するのもよいであろう。

【評価】文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。

❷「古文を読むために1」を参照する。生徒にとって意味のつかめない部分は、古文特有語や古今異義語を含む部分であろう。そうした語を古語辞典で調べさせる。意味が複数あげられている場合は、文脈上どの意味を用いるべきか、前後の文脈から考

えさせる。「言葉と表現 1」であげた「念じ」「わびし」のほか、「おどろく」「いらふ」などの語も調べさせ、重要語として覚えさせたい。

【評価】 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❸主語・述語の関係をつかみながら、内容を理解させる。主述関係を確認する部分は、「出で来るを待ちけるに」「ひしめき合ひたり」「おどろかさむずらむ」「待ちけるかともぞ思ふ」「あな、わびしと思ひて」など。

【評価】 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、現代語訳により、確認する。

・話の展開について、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、現代語訳により、確認する。

❹児が心の中で思っていることが書かれている部分（心中語）に〈　〉を付けさせる。〈　〉を付けた部分を現代語訳し、それぞれの場面で児が何を思っているのかをまとめさせる。心中語を拾うには、引用の「と」に注目させる。

【評価】 児の心情の変化について、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価しているか、教室での質疑応答や小レポートの提出などにより、確認する。

■まとめと発展

学習活動のポイント

❶僧の笑いの意味について考える。主態　→「言語活動」1

❷歴史的仮名遣いと内容について理解できたか、確認しながら音読する。知技(1)ア・(2)エ　思判表B(1)ア

❸重要古語の意味・用法を整理する。知技(1)ウ

❶僧たちはなぜ限りないほどに笑ったのか。笑うきっかけになった出来事と、そこに至る児の心情の変化、心の葛藤を踏まえ、まとめさせる。この「笑い」に生徒も大いに共感し、ほのぼのとした心境になるであろう。

【評価】 進んで説話のおもしろさを味わい、歴史的仮名遣いの読み方や古語と現代語の違いを理解し、学習課題に沿って、内容や展開などについて叙述を基に的確に捉え、僧たちが児を笑った理由を話し合っているか、分析する。

❷歴史的仮名遣いを正しく読めているか、単語や文節の途中で切るなど、不自然な読み方をしていないかに注意させる。

【評価】 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

・時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古

典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、確認する。

・文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。

❸古語辞典の引き方を確認する。重要古語は教材や単元ごとにノートにまとめて、繰り返し復習させると実力がつくであろう。

【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ノート提出により、確認する。

指導上の注意点

●一六ページ

問 **(1)「かいもちひせむ」（2行目）と、(2)「わろかりなむ」（4行目）の「む」の意味の違いを答えよ。**

答 (1)意志　(2)推量

問 **答** **「この児、心寄せに聞きけり。」（3行目）とあるが、児は何を期待しているのか。**

補 **答** ぼた餅を食べられるであろうこと。

僧が「いざ、かいもちひせむ。」と言うのを聞いて右のように思ったのである。

問 **「さりとて」（3行目）以下の文で、児が心の中で思っていること（心中語）に〈　〉を付けよ。**

答 〈し出ださむを待ちて寝ざらむも、わろかりなむ〉（3行目）、〈さだめておどろかさむずらむ〉（8行目）、〈うれし〉（10行目）、〈ただ一度にいらへむも、待ちけるかともぞ思ふ〉（11行目）、〈いま一声呼ばれていらへむ〉（一七・1行目）、〈あな、わびし〉（3行目）、〈いま一度起こせかし〉（同）。

補 児の心中語より、その心情の変化を確認する。「と」という引用の格助詞に注目させるとよい。

問 **「し出ださむを待ちて寝ざらむも、わろかりなむと思ひて」（4行目）について、**

語句の研究

●一六ページ

2今は昔　「今は昔」「これも今は昔」「昔」「これも昔」など、説話、物語の冒頭に用いる常套句。解釈については諸説ある。「今は昔である」と捉え、「話の中の出来事が起こっている時＝昔」の時点に、語り手（作者）も聞き手（読者）もいると仮定しているという説（馬淵和夫ほか）もあるが、「今」は「語り手が語っている現在」とする説が一般的である。ここは従来の説に従って、「今となっては（それは）昔のことだが」と解釈した。

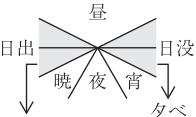
2比叡の山　比叡山は京都府と滋賀県との境にある。ここでは比叡山にある天台宗の総本山、延暦寺をさす。延暦七（七八）年に最澄によって開かれた。

2児　格式の高い寺院で、高位の僧の身辺の世話をする少年。出家者としての僧ではなく、俗体のままであって、昔話の小坊主などではない。貴族の子弟が高僧の身辺に仕えて、学問などの心得を学ぶような場合もあったようで、寺の中で、格別の存在として敬意をもって遇せられた。また、華やかな俗体の児姿から、墨色の寺にあって、一種の憧れをもって見られていた様子は、「徒然草」第五十三・五十四段の仁和寺の児の話などによく表れている。なお、「宇治拾遺物語」では、本教材の次の段も「田舎の児、桜の散るを見て泣くこと」と題する児の話題で、児への関心の高さがうかがわれる。

2ありけり　現在では「あり」は、物事に対して用いるが、古文では「いる」の意で、人に対しても用いる。助動詞「けり」は、間接的に伝聞した過去を表す。

2宵のつれづれに　「つれづれ」は、下二段動詞「連る」の連用形を重ね用いた語で、ある状態が長く続くさまを言うのが原義。変化がなく単調で、所在ない様子。「宵（よひ）」は、日没前後の「夕べ」と、「夜（または、夜中）」との間の時間。

なお、明け方に向かっての時間を指す「暁」と「宵」が対応し、「夕べ」と対応する日の出前の時間は「朝」または「あけぼの」となる。



2かいもちひ　用例が多様で、意味を特定し

1　(1)**「し出ださむ」、(2)「待ちて」、(3)「寝ざらむ」の主語は、それぞれ誰か。**

2　**この部分から、児のどのような気持ちがうかがえるか。**

3　**2の気持ちと同様の気持ちが表れている部分を、本文中から抜き出せ。**

4　**「わろかりなむと思」った結果、どのような態度をとったのか、(1)簡潔に説明せよ。(2)当てはまる部分を、本文中から抜き出せ。**

答　1(1)僧たち　(2)児　(3)児　2僧たちにぼた餅を食べたがっていると思われるのはみっともないと思う気持ち。3ただ一度にいらへむも、待ちけるかともぞ思ふ　4(1)片隅に寄って、寝たふりをして、出来上がるのを待っていた。(2)片方に寄りて、寝たるよしにて、出で来るを待ちける

問　**児が「片方に寄りて、寝たるよしにて」（5行目）という態度をとったのは、なぜか。**

答　ぼた餅を食べたがっていると思われるのは、食い意地がはっているようでみっともないと、体面を気にする気持ちから。

補　この体面を気にする児の気持ちが、この話の発端である。この児の性格や育ちなども想像できるところであろう。また、「語句の研究」で述べているように、児という存在が僧たちの憧れの対象であったこともあり難い。「徒然草」第二百十六段には、「一献に打ち鮑、二献に海老、三献にかいもちひにて止みぬ。」とあるので、「酒の肴」とも考えられるが、第二百三十六段（「丹波に出雲といふ所あり」）では、土地の豪族が都人を地方に誘うにあたって「かいもちひ召させん」と言うような「御馳走」である。福田秀一氏は、「かいもちひ考」（「解釈」寧楽書房　昭和三十九）で、「その本義は、いはゆる『あんころ餅』乃至『牡丹餅』であつたが、既に中世から『そばがき』の意味の語『そばかいもちひ』の略称としても転用されてゐたのではあるまいか」と結論している。この話の場合、僧たちが夜の即席の食べ物として作っているので、そばがきの類であろうとも考えられるが、一般的にはぼた餅と解釈されている。

3し出ださむを待ちて　「し出だす」は、「物をつくりだす、事をやってのける」などの意。助動詞「む」は推量の意。ここは「…を待つ」という「待つ」対象を表す格助詞「を」に続く連体形で、「む」の後ろに「の」「こと」などを補って考える。「作り上げるの（こと）を待って」。

4寝ざらむも　「寝ないでいるとしたら、それも」。この助動詞「む」は、下に格助詞「も」が接続しており、このような場合は仮定でとることが多い。「もし…としたら、それも～」の意となる。ここは、児が気を遣いすぎるあまり、心の中であれこれ考えをめぐらしてしまうところなので、仮定とした。

4わろかりなむ　「わろし」は、相対的に見て「劣る、よくない」の意で、「絶対的、本質的に悪い、不快だ」の意の「あし」とは異なる点に注意する。同様に、相対的に見て「よい、悪くない」の意になるのが「よろし」で、「絶対的、本質的によい」の意は「よし」になる。順番に並べると、よい方から「よし」→「よろし」→「わろし」→「あし」となる。「なむ」は、強意（確述）の助動詞「ぬ」の未然形「な」に推量の助動詞「む」が付いたもので、「きっと…だろう」と訳す。

5寝たるよしにて　「たる」は助動詞「たり」の連体形で、ここでは存続の意。「よし」は、ここでは「そぶり、ふり」の意。「にて」は状態の意の格助詞。

5出で来るを　「出で来」は、起こる、出来上がるの意の複合動詞。

り、そのような立場への児本人の自覚もあったと考えられる。

問 **「すでにし出だしたるさまにて」（6行目）とあるが、何を「し出だし」たのか。**

答 ぼた餅

問 ◉**「思ひて」（4行目）「待ちけるに」（6行目）「ひしめき合ひたり」（7行目）の主語は、それぞれ誰か。**

答 思ひて＝児、待ちけるに＝児、ひしめき合ひたり＝僧たち

補 寝たふりをしてぼた餅ができるのを待っていたのは誰か、ぼた餅ができて騒いでいるのは誰か、把握させる。

問 ①**「おどろかさむずらむ」（8行目）の主語は、誰か。**

②**「おどろか（す）」の意味を、「おどろく」との意味の違いが分かるように説明せよ。**

答 ①僧たち　②「おどろか（す）」は「起こす」の意であり、「おどろく」は「起きる」の意である。

問 **「もの申しさぶらはむ。おどろかせたまへ。」（9行目）という僧の言葉を聞いたとき、児はどのように考えたのか、三項目に分けて答えよ。**

答
- うれしいと思った。
- たった一度呼ばれて返事をしたら、待っていたのかと僧たちに思われるといけないと考えた。
- もう一

7ひしめき合ひたり　「ひしめく」は、擬態語「ひし」に接尾語「めく」が付いて動詞化した語。「押し合いへし合いする、集まって騒いでいる」の意。「合ふ」は、ここでは「みんなで…する、…しあう」の意の補助動詞。

8おどろかさむずらむ　「おどろかさ」は「人を起こす」の意の他動詞サ行四段活用「おどろかす」の未然形。「す」は使役の助動詞ではない。「むず（んず）」「らむ（らん）」は、それぞれ推量、現在推量の助動詞の終止形。

9待ちゐたるに　「ゐる」は「…ている」の意の補助動詞。

9もの申しさぶらはむ　「もの申す」は「もの言う」の謙譲語。相手に話しかけたり、案内を請うたりする時に使う言葉。もしもし。補助動詞「さぶらふ」は聞き手に対して敬意を表す表現。僧は児に対して丁寧に呼びかけている。

10おどろかせたまへ　「おどろか」は、カ行四段活用の自動詞「おどろく」の未然形「目が覚める、起きる」の意。「せ」は尊敬の助動詞で、「たまへ」は尊敬の補助動詞の命令形。「せたまふ」で二重敬語（最高敬語）になっている。二重敬語は、地の文では主に天皇や皇后、それに次ぐ身分や地位の高い人々に使用されるが、ここでは児に用いられていることに注意したい。「児」の項でも触れたように、この児は貴族の子弟など、よい家柄の出自であることがうかがわれる。僧たちが特別な敬意を持ってこの児に接していたことが、言葉遣いからも分かる。ここは会話文で、敬語が多用されることを前提としても、この児がそう扱われるだけの存在であったことを示しておきたい。

11いらへむも　「いらふ」は「返答する、返事をする」の意。「む」は、「寝ざらむも」の「む」と同じく、仮定の意。

11待ちけるかともぞ思ふとて　「『待ちけるか』ともぞ思ふ」とて、という文脈。「…もぞ…連体形」は、「…もこそ…已然形」と共に、「…したら困る、…するといけない」の意。生徒がよく見る例としては、「玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする」（「新古今和歌集」式子内親王）や、「烏などもこそ見つくれ（烏などが見つけては大変だ）」（「源氏物語」若紫）がある。「とて」は格助詞「と」

声呼ばれてから返事をしようと我慢した。

問 **僧たちの児に対する言葉遣いから、児が寺院の中でどのような存在であったことが分かるか。**

答 敬語が使われているところから、身分のある家の子供など、特別な存在であったことが分かる。

補 僧たちと児の関係を把握することで、場の雰囲気が感じられてくる。児が体面を気にするのも、ここにその理由がある。

問 **「うれし」（10行目）と対応して用いられている語は何か。また、それぞれどのようなことに対する心情か。**

答 対応している語　わびし
うれし…ぼた餅が出来たと起こしてくれたこと。
わびし…僧たちに寝てしまったと思われて、起こしてもらえなくなったこと。

補 語句の意味を正しく理解させ、そのうえで児の心情の変化をたどる手がかりにさせる。

問 **「うれし」（10行目）とは、ある予想が当たったときの思いであるが、(1)どのような予想か、簡潔に説明せよ。(2)どのような予想か、当てはまる部分を本文中から抜き出せ。**

答 (1)ぼた餅が出来上がれば、僧たちが自分をきっと起こしてくれるだろうという予想。
(2)さだめておどろかさむずらむ

問 **「いらへむ」「待ちける」「思ふ」（11行目）の主語は、それぞれ誰か。**

答 いらへむ＝児　待ちける＝児　思ふ＝僧たち

問 **「待ちけるかともぞ思ふ」（11行目）の現代語訳として、次の（　）に当てはまる語を入れよ。**
（　①　）が（　②　）を待っていたのかと、（　③　）が思うといけない。

答 ①児　②ぼた餅が出来るの　③僧たち

補 短い部分に異なる主語を持つ動詞があることに注意を促し、文意を正しく把握させる。

問 **「待ちけるかともぞ思」（11行目）われることを、児はどのように思ったのか。**

答 いじきたないと思われては体裁が悪いと思った。

問 **(1)前問のように思った児は、結局、どのような態度をとったのか、簡潔に説明し、(2)当てはまる部分を本文中から抜き出せ。**

答 (1)もう一声呼ばれてから返事をしようと、我慢して寝たふりをしていた。(2)いま一声呼ばれていらへむと、念じて寝たる

● 一七ページ

問 **「念じて」（1行目）とあるが、誰が、何を我慢しているのか。**

答 児が、起き出してぼた餅を食べたいという気持ちを我慢している。

に、接続助詞「て」が付いたもので、通常これで一語の格助詞と扱われる。「…と言って、…と思って、…というので」などの意。

● 一七ページ

1念じて　「念ず」は、①心の中で強く祈願する。②ぐっとこらえて我慢する。ここは②。

2な起こしたてまつりそ　「な」は禁止の意の副詞。「そ」は禁止の終助詞で、活用語の連用形（カ変・サ変には未然形）に付く。「な…そ」で「…するな、…してくれるな」。

2寝入りたまひにけり　「入る」は、「すっかり…する」の意の補助動詞。助動詞「けり」は、「児が寝入ってしまったことに今気づいた」という気づきの「けり」と呼ばれるもので、詠嘆の意。会話文や和歌などに多く見られる。

3わびし　思いどおりにならず、失意や困惑を感じる意の上二段活用動詞「わぶ」の形容詞形。ここでは「つらい」と訳した。

3起こせかし　「かし」は念押しを表す終助詞。起こしてほしいと強く願っている児の気持ちが込められている。

3ひしひしと　「むしゃむしゃと」。ここでは、

補 児の内心の本音と、態度が裏腹になっていることが、最後の笑いにつながるので、本音を確認しておきたい。

問 **「念じて寝」（1行目）ているうちに、どのような計算違いが起こったのか。**

答 僧の一人が、眠り込んでしまった児を起こさないようにと言い、僧たちだけでぼた餅を食べ始めた。

問 **「や、な起こしたてまつりそ。」（2行目）という僧の言葉を聞いたとき、児はどのように思ったか、二項目に分けて答えよ。**

答 ・ああ、つらいと思った。・もう一度起こしてくれよと思った。

問 **「聞けば」（3行目）とあるが、誰が、何を聞いたのか。**

答 児が、僧たちがぼた餅を食べる音。

問 **「えい。」（4行目）という返事はどの呼びかけに対するものか。**

答 「もの申しさぶらはむ。おどろかせたまへ。」

補 内容理解に欠かせない問いである。必ず押えさせたい。

問 **児の返事を聞いて、僧たちはどうしたのか。**

答 大笑いをした。

問 **児の心理はどのように移り変わっているか、次のそれぞれの心理を移り変わりの順に並べ替えよ。**

㋐**予想が外れて困る。**㋑**空寝をして待っていたと思われることを恐れる。**㋒**期待しつつ待つ。**㋓**さらに慎重を期そうとする。**㋔**我慢できずに焦る。**㋕**予想どおりの事の運びを喜ぶ。**㋖**寝ないで待つことをみっともなく思う。**

答 ㋖→㋒→㋕→㋑→㋓→㋐→㋔

問 **この児の失敗は、結局、どのようなことが原因で起こったのか、簡潔に説明せよ。**

答 児という立場を弁えつつ、何とかぼた餅を食べようと気をまわしたのが、つくづく裏目に出たこと。

物を食べる様子を表す擬音語。

4 食ひに食ふ　格助詞「に」は、前後に同じ動詞や形容詞を繰り返して、その語の意味を強調する。

4 ずち　「術（ずち）」。「方法、すべ」の意。

4 無期　「際限がなくていつまでも続く」の意から転じて、「期間が長いこと、久しく時がたつこと」。実際の時間の長さもさることながら、児の心理的時間の長さを表現している。

5 笑ふこと限りなし　「限りなし」は、ここでは「限りがない、際限がない」の意。体面を気にして見栄をはっても、結局ぼた餅を食べたい気持ちが表れてしまった児の言動を微笑ましく思う、僧たちの笑いである。嘲笑ではなく、児の子供らしさを愛でる笑いと捉えたい。

鑑賞

比叡山の僧たちが、宵のつれづれに「ぼた餅を作ろう。」と言い出した。そこに居合わせた児が、「自分も食べたい。」と思うが、まさか僧たちが作るのを起きたまま傍らで待っているわけにもいかず、部屋の片隅で寝たふりをして待つことにした。

ぼた餅が出来上がり、「僧がきっと声をかけてくれるだろう。」と児が期待して待っていると、果たして「起きてください。」と僧に呼ばれた。ここまでは予期したとおりであったが、その後、児の思惑が狂いはじめる。別の僧が「もう寝てしまったからお起こし申し上げるな。」と要らぬことを言ったのである。

「もう一度起こしてくれよ。」という児の心の叫びをよそに、僧たちがむしゃむしゃとぼた餅を食べに食べる音だけが空しく響く。焦った児は、ためらい、心の葛藤もあったであろうが、食べたさに勝てず、最初の僧の呼びかけから相当な時間がたって後、「はい。」と返事をした。児は、そら寝をした当初からの心の内を知られ、僧たちに大笑いされたのであった。

「児のそら寝」の話の展開はたいへんおもしろく、児の心情の推移には誰もが共感できるであろう。人の思うこと、考えることには、時代を超えて共通するものがあり、そうしたものに触れ、共感できることが、古文を読むことの大きな魅力である。誰もがおもしろいと感じ、当時の人の心と共鳴できる本教材は、高等学校古文の冒頭教材にふさわしい。万一、古文はとっつきにくいのではと思い込んでいる生徒がいたとしても、そうした苦手意識を払拭できるにちがいない。

楽しみながら、かつ、人間の「心」のありようについて学べる古文に触れることは、生徒の心、精神の涵養に寄与するであろう。今後の古文学習をいっそう有益なものにするために、こうした古文を読む意義についても、授業において生徒に話しておきたい。